

放課後、立ち話をした。環境都市工学のH先生と智能機械工学のK先生、それに国語担当の私という、専門も年齢も異なる、めずらしい組み合わせだ。

H先生「この間、授業で『タイタニック』をされていませんかでしたか？」

私「そういえば、話しました。ジャックとローズが三等船室で踊る場面がありましたよね。あのときのディカプリオの手の離しかたがいいんです。」「手の離しかたですか？」

男女が手をつなぐ、その恐れと喜びについて書かれた文章は世に多い。だが、「手の離しかた」について書かれた文章は、あまり目にしたことがない。もちろん、手をつなぐことは大切だ。恐怖やためらいを乗り越え、私たちは初めて恋人の手を握る。その喜びには何にも代えがたいものがある。しかしである、つないだ手は、いつか離さなければならない。手をつなぎっぱなしだったら、飯も食えない。では、どんなふうに手を離せばいいのか。さりげなく演じたのがディカプリオだ。

ローズの属する一等船客の夕食会に招かれたジャックは、今度はローズを三等船客の宴に誘う。虚飾など必要がない人々は、思い思いに音楽を楽しんでいる。ジャックとローズは手を取りあい、激しいリズムに乗って踊る。やがて踊りがタップダンスに変わり、二人はつないだ手を離し、一人ずつ踊りだす。このときのジャックの手の離しかたが限りなく優しい。一瞬の映像であるから見逃さないでほしい。ジャックはローズの手を左手で握ったまま舞台にあがると、右手をローズの手首に添え、次に離した左手をローズの肘に移動させ、そのあとで手を離している。つまり、ジャックはローズの腕をさっとやさしく二回握り、つないだ手の記憶をとどめるようにして、手を離すのだ。このしぐさが監督の指示なのか、ディカプリオの創意なのかはわからない。いずれにせよ、あんな心のこもったしぐさができてしまう俳優に私は感動しないではいられない。

話を聞き終えたK先生「『タイタニック』を私が見たときはですね、まず、プラモデルを作って船の構造を確かめて、それから見ました。ずいぶん見方が違いますねえ。」

「私は女房と初めて行った映画が『タイタニック』で」とH先生。「隣に座っている彼女のことばかり考えていました（笑）。」そのときのH先生も、きっと手について考えていらしたのではなかろうか。